

# Book Review

## デンタルスタッフのための 歯科心身症ガイドブック

和気裕之・澁谷智明・目加田まり 著



Reviewer

依田哲也 Tetsuya Yoda

(日本顎関節学会理事、日本歯科心身医学会理事  
埼玉医科大学医学部口腔外科学 教授)

歯科心身症は、舌痛症や一部の顎関節症のように心理社会因子が発症や経過に関与している歯科疾患のことです。歯科医院ではあまり関係ないと思いの先生方もおられるかもしれませんが、決してそうではありません。たとえば、齲蝕や知覚過敏でもないのに歯が痛い特異性歯痛（非定型歯痛）も代表的な歯科心身症ですが、もし正しく診断できずに抜髄や抜歯をしてしまうと、疼痛が改善しないばかりか、トラブルになりかねません。同様に咬合違和感症候群も要注意です。

また、日本人の40人に1人が精神疾患で医療機関を受診しており、歯科医院には毎日1人以上の精神疾患のある患者が来院している可能性があります（本書序言）。これらの患者のなかには、良好な歯科治療を行っても想定外な受け入れになる危険性を含んでいます。特に矯正やインプラント、義歯等の保険外診療では、たびたびトラブルが報告されています。このような心身医学的・精神医学的な配慮が必要な患者も、広義の歯科心身症として定

義されています（本書2頁）。

著者代表の和気先生は、長年にわたって大学病院で客員教授または非常勤講師として、心身症患者の専門外来を主催し、学生講義も担当されてきました。しかし、本来は歯科医院院長としても多くの臨床例を経験されており、本書は、そのような歯科臨床医に、口腔外科臨床医と歯科に精通した臨床心理士が共著者として加わることで、タイトルにふさわしく、歯科衛生士や受付担当等の歯科医院で働くスタッフにぜひ読んでいただきたい本となっています。イラストをたくさん用いて丁寧に解説されていますので、基本から再確認したい歯科医師にもお勧めです。

私が東京医科歯科大学に勤務していた頃、心理社会因子の関与が疑われた顎関節症患者を専門外来で和気先生に診てもらったことがあります。その結果、「就職である舅の不倫問題の悩み、経営する幼稚園の悩み等」が次々と明らかになりました。さらには、サプリメントで症状が軽減したという申告も、私に遠慮した患者の虚言であったこと



B5判、92頁  
オールカラー  
定価（4,200円＋税）  
医歯薬出版刊

もわかり、問診（医療面接）の重要性を痛感した次第です。第3章では、このような歯科心身症を的確に診断するための、著者らの巧みな医療面接のテクニックが詳しく解説されています。

第4章では、認知行動療法や、バイオフィードバック、漢方薬治療、精神科医等とのリエゾン（連携）などについて解説されています。そのなかで、本書では歯科衛生士をゲートキーパーと位置づけています。ゲートキーパーとは、たとえば自殺の危険や悩んでいる人の示すサインに気づき、声かけや必要な支援を図ることができる、いわば「命の門番」とも位置づけられる人のことです（本書66頁）。社会に対する歯科医院の新たな役割として、重要な提言ではないでしょうか。

最後に本書の後書きから、「身体のほかに、心理面や環境面も含めて患者さんを知ることができれば、より深く症状を理解することが可能になり、患者さんが治る手助けもできるでしょう」。